

# 2022年度事業報告書

2022年4月1日から2023年3月31日まで

公益財団法人 森林文化協会

## 1. < 総論 >

森林文化協会は 2022 年度、「調査・研究」「森づくり・森の支援」「普及啓発」を柱とする公益目的の事業を実施し、脱炭素社会につながる森林環境の保護・育成をテーマに、国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）の推進を後押しした。年報『森林環境』や web 版『グリーン・パワー』などを通じて、地球環境の現状を伝え、国民の理解や関心が広がるよう努めた。さらに、ここ数年、新型コロナウイルスの影響で停滞していた自然観察会・撮影会など各種イベントを再開。新聞や雑誌を活用した広報・宣伝活動も精力的に展開し、協会の知名度向上を図るとともに、幅広い世代に森林保全の重要性を訴えた。

## 2. < 調査・研究 >（公1: 森林試験研究事業）

### 【1】森林環境研究会の活動

森林文化協会が設置する専門委員会。森林や環境の研究に携わる学者と環境問題に関心を持つジャーナリストら 11 人で幹事会を構成している。22 年度の幹事会は主にオンライン会議で意見交換を重ね、当該年度の研究テーマに沿った調査研究活動を実施するとともに、協会活動に対する助言や協力を受けた。

#### < 幹事会の構成 >

青木謙治・東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

一ノ瀬友博・慶應義塾大学環境情報学部 学部長・教授

井上真・早稲田大学人間科学学術院教授、東京大学名誉教授（座長）

鎌田磨人・徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授

黒沢大陸・朝日新聞論説委員

酒井章子・京大大学生態学研究センター教授

田中俊徳・九州大学アジア・オセアニア研究教育機構准教授

田中伸彦・東海大学観光学部教授（座長代理）

野上隆生・朝日新聞久留米支局長

則定真利子・東京大学大学院附属アジア生物資源環境研究センター准教授

原田一宏・名古屋大学大学院生命農学研究科教授

### 【2】学術年報事業『森林環境』の編集・発行

『森林環境』は 2004 年から発行している森林環境研究会編著の年報。22 年度の研究テーマは「激甚化する自然災害と森林環境」で、気象災害が頻発化する中、土砂災害を軽減する森林の公益的機能や里山の役割などについて掘り下げる一方、自然環境が有する機能を社会課題解決に活用する「グリーンインフラ」の取り組みを紹介した。環境保全関連の最新の話題を伝えるトピックス・レビューは、生物多様性条約 COP15 の議論や、明治神宮外苑の再開発などにスポットを当て、森林環境をめぐる現状を報告した。

### 3. <森づくり・森の支援>(公2:森林環境保全事業)

#### 【1】「つくば万博の森」実験林事業

つくば万博の森は、茨城県つくば市の宝篋山(ほうきょうさん・標高 461メートル)中腹にある松枯れで皆伐された約 10ヘクタールの国有林で、朝日新聞社の呼びかけで全国約 4万 2千人から集まった寄付金を基に 1985年と 86年に約 3万本のヒノキを植樹した。その後、協会が維持管理を担い、関東森林管理局と 2045年まで 60年間の分収造林契約を結んでいる。

森の健やかな成長を促すため、21年度から 3カ年計画で間伐を実施。2年目の 22年度は 5.2ヘクタールを対象に、地元森林組合に間伐作業を業務委託した。一方で、地元の県職員OBに引き続き巡回整備を委託し、現地の維持管理に努めた。

宝篋山は首都圏近郊の登山・ハイキングのコースとして人気がある。協会としても森づくり支援を進めるため、森林保全や登山道整備に取り組むNPO法人などと意見交換しており、地元の森林環境教育に貢献していく。

#### 【2】国際森林デー「みどりの地球を未来へ」

国連が 2012年に定めた「国際森林デー」(3月 21日)にちなみ、国内では 14年から、東京湾の埋め立て地「海の森公園」を中心に、記念植樹やコンサート、木工教室などの中央行事を開催してきた。主催は当協会、林野庁、国土緑化推進機構、オイスカ、樹木・環境ネットワーク協会の 5者で構成する実行委員会。2020年から 3年間はコロナ禍のため中止していた。

4年ぶりの開催を決めた 22年度は、プレオープンイベントが行われた同公園を会場に選定し、従来の規模を縮小して除草ボランティア活動とパネル展示を企画。開催予定だった 3月 18日は雨天のため、ボランティア活動は中止となったが、パネル展示は 3月のプレオープンイベント期間中、実施した。

#### 【3】森林の保全・利用に取り組む団体への支援

##### ■くつきの森の利用・管理支援

かつて「朝日の森」があった「くつきの森」(滋賀県高島市朽木)は、地元のNPO法人・麻生里山センターが管理する市有地(約 150ヘクタール)で、クヌギなどを主体とした里山林となっている。麻生里山センターは地元の麻生地区をはじめ高島市や支援企業、地元の研究者などと連携して、森林や草原の再生・活用に関するプログラムを展開している。22年度も引き続き、同センターの活動を協会ホームページやメールマガジンで紹介するなど、企画・運営を支援した。

##### ■上ノ原・入会の森の利用・管理支援

「上ノ原・入会の森」(群馬県みなかみ町)は東京の市民団体・森林塾青水が管理する町有地(約 21ヘクタール)で、ミズナラを主体とした二次林とススキ草原からなる。青水は地元藤原地区の住民やみなかみ町、支援企業と協力して、旧薪炭林の保全や茅場(ススキ草原)の再生などに関するプログラムを展開しており、21年度も春の野焼きや夏の防火帯整備、ミズナラ林の遊歩道整備の周知など、引き続き運営に協力した。

#### 4. <普及啓発事業>(公3:森林普及啓発事業)

##### ■情報サイト「グリーン・パワー」の編集・配信

1979年創刊の森林文化に関する月刊情報誌『グリーン・パワー』が、2022年1月に全面デジタル版に移行した(無料公開)。22年12月までは、「時評」「FOCUS」「海の酸性化 もう一つのCO<sub>2</sub>問題」「絵暦」「木育とおもちゃ美術館」など、硬軟織り交ぜたコンテンツの計8コーナーを抱え、月ごとに編集・配信してきた。23年1月からは、カナダ在住の写真家による「色彩でめぐる世界の絶景」を新たにスタートさせるなど一部を入れ替え、計7コーナーで情報を発信している。長期シリーズとなっている人気の「亜熱帯やんばるの森」には22年春から動画機能を付与。写真だけでは伝えきれない希少動物の生態を動画でも届けられるようにし、若年層にも親しまれるコンテンツづくりに努めた。

##### ■協会ホームページの大幅改修・発信強化

「グリーン・パワー」のデジタル化1年を機に23年1月、協会ホームページのリニューアルに踏み切った。サイトの中核となる「グリーン・パワー」のデザインやロゴを一新し、視認性や操作性を高めた。主催事業をわかりやすく整理するなどし、会員らが求める情報を積極的に発信できる装いに改めた。サイトの冒頭文も刷新し、「『SDGs』といった言葉もない1978年、森林文化協会は設立されました。自然とともに持続可能な社会を実現したい。約半世紀前からそんな思いで活動しています」と、近年の潮流を先取りしていた団体であることを強調した。

一方で、朝日新聞社のコーポレートサイトに「森林保護」の項目を新設してもらい、協会サイトにも連動させた。膨大なインターネット読者が行き来する朝日グループのサイトを通じて、多くの人に協会の存在を知ってもらい、共感してもらえるような仕掛けづくりを進めた。

#### 《主催事業》

##### ■日本の自然写真コンテスト

いつまでも守り続けたい日本の自然を題材にした朝日新聞社と全日本写真連盟、当協会の主催コンテスト。全国から寄せられた四季折々の写真の中から毎年、森林に関係した作品を選び、森林文化協会賞を贈っている。第39回を迎えた22年度は、高橋徹氏(新潟県)の「樺林燦燦(ぶなりんさんさん)」が受賞。作品は年末に発行した協会オリジナルカレンダーの表紙に採用した。

##### ■国民参加の森林(もり)づくりシンポジウム

朝日新聞社や国土緑化推進機構、当協会などが主催し、全国育樹祭の前年に開催地で行うイベント。22年度は12月1日に、約400人を集めて茨城県常陸太田市の市民交流センターで開催した。基調講演では、建築家で東京大学特別教授の隈研吾氏が国内外の建築例を紹介しながら、鉄やコンクリートに代わる木造建築物の魅力や可能性を強調。「森とまちづくり」と題したパネルディスカッションでは、地元で工芸素材づくりや新スタイルのアウトドア活動に取り組むパネリストらが、森と人が共生できる環境づくりについて議論を深めた。

#### ■グリーンセミナーの開催

近年、コロナ禍で中止を余儀なくされていた野外セミナーや自然観察会、撮影講習会を一本化したうえで、「グリーンセミナー」に名称変更し、22年秋に皇居・東御苑、明治神宮、浜離宮恩賜庭園(以上、東京都)、京都御苑(京都市)の4カ所で計6回開催した。宮内庁職員OBや樹木学者、森林インストラクターら専門家の解説を聞きながら、「都会のオアシス」とされる身近な自然を観察する催しで、計約250人が参加。協会活動の理解にもつながり、新規会員約60人を獲得した。

#### ■赤沢森林浴大会

森林浴発祥の地とされる長野県上松町の「赤沢自然休養林」で、1982年から地元の上松町や町観光協会とともに主催している。地元の木曾森林管理署やNPO法人のガイドつきで、木曾ひのきの天然林をはじめ、サワラ、ネズコ、アスナロといった針葉樹が中心の保護林を約4時間かけて歩く。コロナ禍で中止となっていたが、22年秋、3年ぶりに再開。リピーターを含む約50人が参加した。赤沢自然休養林は2006年4月に第1期セラピー基地に認定され、森林の持つ癒しの力を活用する研究が進んでいる。

#### 《後援事業》

##### ■東京おもちゃ美術館の「木育サミット」

東京おもちゃ美術館が主催する「木育サミット」を引き続き後援した。木に親しみ、木を生かし、木と共に生きていく「木育」の活動を全国に広めていくことを目的にしたイベントで、『グリーン・パワー』でも活動を紹介した。

##### ■「農」と里山シンポジウム

埼玉県西部の「三富地域」では、里山を活用した伝統農法が営まれており、この農業と里山のシステムを維持・発展させることを目的に、三富地域農業振興協議会が主催し、10月に開催されたシンポジウムを後援した。

##### ■わたしの自然観察路コンクール

自然を大切にす青少年の心を育てるため、自然を観察できる身近な道を自分でつくって絵地図と文章で表現するコンクール。公益信託富士フィルム・グリーンファンドなどが主催しており、第39回を迎えた22年度の事業を後援した。

##### ■丹波の森ウッドクラフト展

木を素材とした工芸品や玩具をテーマにした全国コンクールで、兵庫県立丹波年輪の里などが主催している。第34回を迎えた22年度の事業を後援した。

以上